

「朧月夜」歌の評価をめぐって

——『新古今集』撰集意識一面——

紙 宏 行

文集、嘉陵春夜詩、不明不暗朧月といへることをよみ侍りける

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき

(『新古今集』卷一・春上・五五)

この歌の出典は、周知のごとく『句題和歌』(七二)であり、これに句題としての漢詩句を明示してある。『句題和歌』では、下句が、「朧月夜ぞめでたかりける」となっている本もある(群書類従本など)。しかし、最善本たる書陵部本は『新古今集』と同じ本文であり、今はこれは問題にしないであろう。

『句題和歌』(大江千里集)は、宇多天皇の「古今和歌多少献上」の勅命によって寛平六年成立(九年説も)、全二二六首(書陵部本)、そのうち一一五首が『白氏文集』などの漢詩の一句を句題として和歌に翻案したものである。吉川栄治氏によれば、『句題和歌』は、「自己の儒者的力量の顕示を目的に」「佳句撰的な章図すら包蔵して」編集されたもので、「歌の翻案的態度、和歌としての自立性の乏しさ」を特徴とし、「直接的な影響力を同時代に及ぼす事はなかった」という^①。確かに、千里歌は『古今集』に一〇首入集しているが、『句題和歌』からは、一首も撰ばれていない。千里に限らず、この時代の歌人の句

題歌は『古今集』には一首もなく、句題歌全般が、単なる漢詩句の翻案ということで、和歌としての自立的価値を認められなかったらしい。この「朧月夜」歌として例外ではない^②。さらに、『後撰集』にも取られず、『拾遺集』以下五集にもなく、『新古今集』になってやっと勅撰集入集をみる。『源氏物語』に引歌され、女君の呼び名の典拠ともなった歌であるが、後代はともかく、この歌が詠まれた当時は、句題歌全般の評価の低さに埋もれてたのか、その評価は低かった。

時代が下って、この歌に対する評価を具体的に検証することは困難であるが、『古今六帖』ほか、各種撰集にも見えず、公任撰『前後十五番歌合』、『三十六人撰』などの秀歌撰には、この歌はおろか、千里歌そのものが見えない。秀歌撰に大江千里歌が撰ばれるのは、俊成撰『古三十六人歌合』が初めてであり、この点について「袋草紙」は不審を表明していて、千里自身の歌人としての評価は低くはなかったようだが、しかしこの歌は見えない。歌論書・歌学書の類もとりあげられず、また説話などにもないようなので、後の時代でも評価は高くはないと考えられる。根拠はやはり漢詩句の翻案にすぎないということであろうか。

『新古今集』の現代の諸注釈をみると、たとえば窪田空穂氏は、「照りもせず曇りもはてぬ」は、「不明不暗」の逐語訳である。

「春の夜の朧月夜」は、「朧朧月」の訳であるが、これは「春の夜」を添えなければ通せず、「月」も「夜」を添えなければ足

りないとしたのである。

のごとく、漢詩句の直訳であると逐一指摘し、結句「しくものぞなき」について、

この詠歎の加わったがために、一首が説明的気分を帯びたものとなり、句のもつ耽美気分がそがれて希薄となっている。

と高い評価を与えない。評価そのものは的確といえようが、この歌が漢詩の直訳であることを前提とした評価になってしまっている。「八代集抄」も、

上は詩の詞を其のまゝにて明か也。
と記している。

「朧月夜」歌の評価は、詠作当時から現代に至るまで一貫して漢詩句の直訳という点を最大の根拠として、高くないまま推移したようである。

二

『源氏物語』「花宴」巻に、この「朧月夜」歌は引かれている。

女御は、上の御局に、やがて参り上りたまひにければ、人少ななるけはひなり。奥の枢戸も開きて、人音もせず。「かやうにて世の中にあやまちはするぞかし」と思ひて、やをら上りてのぞきたまふ。人はみな寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞えぬ、「朧月夜に似るものぞなき」とうち誦じて、こなたざまには来るものか。いと嬉しくて、ふと袖をとらへたまふ。

ここから、後世の読者はこの右大臣の六の君を朧月夜尚侍と呼ぶ。「しく」が「似る」となっていることについて、『湖月抄』に「此草紙にかやうの事おほし。女の月をめでて吟じたる也」とあり、これを受けて、玉上琢弥氏は「『しく』は漢文訓読語なので、女にふさわしく、『似る』と言いかえたのであろう」と解説している。『句題和歌』

『新古今集』諸本に「似る」となっているものが見あたらないので、そう考えるのが妥当だが、『奥入』は「似る物ぞなき」としており、『源氏物語』の本文に拠ったのでなければ、この形の本文も存していたのかもしれない。伊行『源氏積』や定家『奥入』は、この部分の引歌として正しく「朧月夜」歌を指摘しており、新古今時代において既にこの引歌は周知のこととなっていたようである。

それ以前に俊成が、この引歌を指摘していて、

その哥は、源氏物語に、二月の花の宴の巻に、内侍督におほる月夜といはせて候を、教長も清輔も源氏を見候はず、まして文集と申文をも見候はで、白楽天の詩に、「不明不暗朧々月、非暖非寒漫々風」と申詩をこの哥にもよみて候を、いづれをもしり候はで、夏の夜とかきて夏の部に入れて候。

と記している。この部分は、清輔や教長がそれぞれの私撰集において「朧月夜」歌の部類を誤っていたことに対して糾弾する叙述ではあるが、『源氏物語』注釈史上においても興味深く、また「朧月夜」歌の評価をめぐっても看過することはできない。というのは、久保田淳氏が、この歌が『新古今集』に撰入された理由として『源氏物語』の引歌としてのこの作に敬意を表した結果であることはまちがいないであらう」と述べているからである。

これについては、同じく俊成の「花の宴の巻は珠に艶なるものなり」という発言も想起される。久保田氏のさきの説は、明言されていないが、俊成のこの発言も視野に入れてなされたものであろうし、その意味で首肯すべき考えではある。しかし、この俊成の発言は、あくまで「艶」という美的基準において「花宴」巻の王朝の色好みの世界が特に選ばれたのであって、「朧月夜」歌そのものが「艶」であるとして高い評価を与えられたのではない点には、注意しておきたい。定家ら『新古今集』撰者もこのような俊成の考えを継承してはいたらうし、彼らとしても、『源氏物語』引歌という理由によってのみ「朧

月夜」歌を『新古今集』に撰入したわけではないと思う。後に述べるように、「朧月夜」歌を本歌取した歌が、いずれも、『源氏物語』の世界をふまえていないことも、その証左となる。

ちなみに、『奥入』所収歌の勅撰集入集状況を調べてみると、

古今	一三四
後撰	四二一
拾遺	四〇
後拾遺	四
金葉	〇
詞花	〇
千載	二
新古今	八
新勅撰	一〇
続古今	四
風雅	一
新千載	三
入集せず	一二三

となる。『新古今集』よりもむしろ『新勅撰集』の方が『源氏物語』引歌を多く入集していて、定家の意識を見ようとするなら『新勅撰集』をこそ注目すべきであるが、いずれにせよ、勅撰集に入集しない歌に比べ圧倒的に少ない。『古今集』が多いのは引歌がこれを規範視した上で成立したのだから当然として、そういう状況をすべて対象化している『新古今集』への入集はやはり少なく思われる。量的に処理できる問題ではなく、それぞれの引歌の重要性を問わねばならないが、『源氏物語』に引歌されたことを唯一の理由に勅撰集に入集していたとは考えられない。和歌と物語とは多様な局面で深く相互交渉していたが、一方で勅撰集撰集のごとき晴の場においては、両者は画されていた。

伊井春樹編『源氏物語引歌索引』によればこの歌を引歌する箇所は「花宴」巻のこの部分以外にはない。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』雜一・一一〇三、兼輔朝臣）の歌などは二十六箇所にも引歌されていて、引歌としての「朧月夜」歌は量的にはとるに足りない。ただ、この引歌は、花宴の後、ほろ酔い気分の光源氏が藤壺中宮を求めて宮中をさまよい朧月夜の君に邂逅する、妖艶な場面の描写に決定的な意味（まさに邂逅の契機となる）を持って、それゆえ女君の呼び名ともなり、さらに光源氏の須磨流謫の宮廷における表向きの原因となるように、重要な引歌には違いない。

しかし、この引歌を、「湖月抄」が掲出しているにもかかわらず、『玉の小櫛』は認めていない。『湖月抄』とは注釈としての細密の度に差があるので即断はできないが、「湖月抄の事」の条にいう「引歌とは、古き歌によりていへる詞にて、かならず其歌によらでは、きこえぬ所也」との限定的概念規定に、この引歌が該当しないというのであろうか。確かに、「朧月夜」歌そのものが、物語の構想やプロット展開に与える衝撃力は何もなかったし、尾崎知光氏のいう引歌本来の「二重的表現」にすらならない。方法としての引歌ではなく、登場人物が古歌を口にしてにすぎないものである。

「朧月夜」歌を女君が口ずさむのは、春の「月いと明うさし出でて」いた情景に適合していたからである。それは、しかし、この歌が人口に膾炙していたからというより、むしろ、「朧月夜」という語句の用例が非常に少なく、和歌では新古今以前にはこの千里歌が唯一例でしかなく、「朧月夜」の語を含み込んだもの珍しい歌としてここに用いられたのではないだろうか。魅力的で、奔放な女君が、耳新しい歌を口ずさんでみせたのである。男君はそれと認知し返歌で応じて、二人は契りを交わし、「艶」な場面が完成する。

『俊頼髓脳』は、この「朧月夜」歌を引き、続けて「かくも詠める

は、花を、散るめでたしと詠める心はべる」と注記する。原典の『句題和歌』以後、『源氏物語』を除き、和歌関係資料では初出である。散る花によって月を見る視界が遮られるのを、朧月に見立てたものと解しているのであろうか。秀歌例としてあげているわけではないが、

「花を惜しみ、月をめづること」の項目中の例歌のひとつであり、俊頼の評価は低くない。付け加えれば、この歌の句題となった白詩が、同時代の基俊撰『新撰朗詠集』に撰入されている。ただし、「朧月夜」歌の方は取られていない。「朧月夜」歌も、俊頼・基俊に顧みられ、『源氏物語』引歌とあわせ、平安中後期になってようやく文学史の表面に現れるようになった。

三

この「朧月夜」歌を本歌取して、定家は、

大空は梅のほひにかすみつつもりもはてぬ春の夜の月

（『新古今集』巻一・春上・四〇、『拾遺愚草』一七三二）

と詠んでいる。建久九年から正治元年にかけて成立の『守覚法親王五十首』春歌中の一首である。これよりさき、建久元年六月の『一字百首』に、

さゆる夜はまだ冬ながら月影のくもりもはてぬけしきなるかな

（『拾遺愚草員外』二）

と同じ本歌取をしている。主題も同じく春の月であろうし、ともに第四句に「くもりもはてぬ」と取っているなど、「大空は」歌は、この旧作を改作するようにして詠まれたものと思われるが、大空にまで風景を広げ梅香を配して「春の夜の官能的な境地を描き出している」¹⁶作に完成されている。定家も自信作であつたらしく、『定家卿百番自歌合』に自ら撰んでいる。「朧月夜」歌は、同じ主題で二度本歌として用いられており、比較的定家の好んだ歌であつたと考えられる。

家隆には、

くもるとは雪げのそらにみしほどにかすみもはてず春の夜の月

（『壬二集』四〇七）

という歌がある。正治二年の『後鳥羽院初度百首』での詠である。これも、「朧月夜」歌を本歌取としているが、定家の「大空は」歌を意識しつつ、良経の「空はなほかすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月」（『六百番歌合』春上・余葉・十二番左、『新古今集』春上・二三）に触発され「雪げの空」を詠みこんで完成したものであろう。

また家隆には、詠作年次は下るが、

春は日もくもりもはてずりもせずいろものなき花の色かな

（『壬二集』一二二四）

という作もある。承久二年『慈鎮大僧正四季百首』花題の歌である。家隆としても、定家らの作に影響されながら、「朧月夜」歌の本歌取を好んで試みている。¹⁷「朧月夜」歌も、本歌取にしばしば用いられるようによく流布してきたが、そのことによって、この「朧月夜」歌が、高く評価されてきたとは即断することはできない。

これら本歌取の歌を見ると、取っている歌句は、いずれも「くもりもはてぬ」の部分であつて、「朧月夜」の部分ではない。ということでは、定家らは本歌の主題に惹かれたのではなく、表現の斬新さに意を得て本歌取したのではないか。定家らの本歌取の歌は、主題は本歌と同じく春の朧月の情趣ではあつても、それに依存してしまふのではなく、「梅のほひ」や「雪げ」などの新しい素材を導入し、本歌をのりこえて、単に朧月だけではない初春の優艶な情趣の新しい主題を生成しえている。これは、次節に引用するように、歌論書・古注類も指摘しているところである。また、定家らは、「朧月夜」歌を本歌取するときには、この歌が、『源氏物語』「花宴」巻に引歌されていることをふまえず、物語の情景を総体的に含み込んで本歌取していない。ただ春の朧月の情趣の歌とのみ受けとめている。このことも、定家らの

「朧月夜」歌に対する評価のありようを明らかにしてくれる。

新古今には「朧月夜」歌と同じ白詩を直接に典拠としている歌もある。前に引いた良経の「そらはなほ」の歌もそのうちの一首である。

しかし、二首を比べてみれば明らかのように、漢詩句の撰取の方法には歴然たる相違がある。良経歌は、「かすみもやらす風さえて」と「朧月夜」とは逆の設定をし、原漢詩句の「朧月夜」をふまえつつ「ゆきげにくもる」と反転して「春の夜の月」と結ぶという複雑な構造で、新古今的な漢詩句撰取の最も尖鋭的な方法を試みている。新古今当代歌と古今時代歌とを同一地平に置いて評価してはならないし、当時も評価していなかったろうが、「朧月夜」歌のあまりに幼稚な直訳的漢詩句撰取では、相対的にも評価は低くならざるをえないであろう。

この歌は、「照りもせず曇りもはてぬ」という、漢詩に典拠を持ちそのリズムと雰囲気伝える表現のおもしろさによって評価されていた。その意味では、決して拙劣な歌として葬り去られていたわけではないし、それなりの評価は得ていたことは否定できない。しかし、『百人一首』『定家八代抄』や『近代秀歌』『詠歌大概』などの秀歌撰(例)には一切撰ばれていないのも、歌そのもの(主題など)によっては評価されていないことを示している(『古来風躰抄』の秀歌例にもないが、これは『万葉集』と『千載集』までの勅撰集からの抜粋という編集方針に拠る)。

前節で述べたように、「朧月夜」の語の用例は平安時代には非常に少なく、新古今時代になって急増し、「新古今好みの語」であるという。¹³⁾「朧月夜」の語は、大江千里の、漢詩句に基づく造語の可能性もある。しかし、おそらく新古今歌人はそんなことは想到しなかったであろう。「朧月夜」歌は、「新古今好みの語」を詠み、気のきいた表現を持った恰好の本歌にすぎなかったのではないだろうか。

四

「朧月夜」歌と定家・大空は「歌の、本歌―本歌取の關係は、次代の歌論書などによくとりあげられている。たとえば、『井蛙抄』には、「一のやう、本歌の心になりかへりてしかもそれにまとはれずして妙なる心をよめる歌、これは拾遺愚草中につねにみゆるところなり」という項目に続く例歌の冒頭に、この二首をならべて掲げる。これと同様の書きようは『愚問賢注』『近來風躰抄』『歌林良材集』などにも受け継がれるのである。このような批評に影響されてか、『拾遺愚草抄出聞書』(C類注)¹⁴⁾は「本歌をとる手本の歌とぞ」と称揚している。

本歌の心を変えないまま、さらに新しい心を添えるという方法が、「本歌をとる手本」というのだろうか。『井蛙抄』の同項目には、この二首の次に「駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」(『新古今集』冬・六七一)の歌とその本歌である万葉歌を挙げているが、この歌は、宗祇『自讃歌注』に「本歌をとれる歌の本」と評されている歌でもあった。

「大空は」歌が「本歌をとる手本の歌」と評されるのは、頼阿周辺のようで、時代が相当下り、本歌取の方法論と実態が整理され、形骸化した頃である。これをそのまま新古今時代にあてはめることはできないが、定家が習作を経た上で完成させていること、家隆が倣って同じ本歌取を試みていること、また『新古今集』のこの歌の撰者名注記も家隆であることなどを考えあわせると、この歌は、詠作当時から本歌取の巧みな歌としても知られていたのではなからうか。定家自身にも、「花の歌をやがて花によみ、月の歌をやがて月にてよむ事は、達者のわざなるべし」(『毎月抄』)と述べる時の「達者のわざ」に相当するという自負はなかったであろうか。『定家卿百番自歌合』に自ら撰ぶほどの自信作であったことは前に述べた。

「朧月夜」歌の『新古今集』撰者名注記は、有家・定家・家隆・雅經の四人を数える。彼らや、また後鳥羽院がどのような基準をもってこの歌を撰んだか、いま明確ではないが、「大空は」歌はじめ数首の本歌としての意味もあったと思う。「朧月夜」歌は、歌そのものとしては、それほど評価は高いことは、前に確かめた。本歌取の巧みな成功例を顕彰する意図で、あるいは、本歌の権威付けのために勅撰集に収載したとも十分考えられるのである。

ほかにも、「たまゆらの露もなみだもとどまらずなき人恋ふるやど
の秋風」(哀傷・七八八、定家)の本歌としての、

あかつきの露も涙もとどまらで恨むる風の声ぞのこれる

(秋上・三七二、相模)

あるいは、「たのめずは人をまつちの山なりと寝なましものをいざよひの月」(恋三・一一九七、後鳥羽院)の本歌としての、

たのめこし人をまつちの山風にさ夜ふけしかば月も入りにき

(雑上・一五一八、よみ人しらず)

など、今ひとつひとつ検証することはできないが、同様の例として挙げられよう。後者は両歌とも撰者名注記はなく(後鳥羽院歌は初出不明)、あるいは竟宴後同時に切り入れられたのかもしれない。『新古今集』の歌のすべて、特に数多い古歌群が、単に秀歌ということだけで(全てある程度の秀歌であることは必要であるが)撰ばれたとは思えないのである。

- (1) 吉川栄治「大江千里小考——句題和歌の成立をめぐる——」(『国文学研究』66集・昭和53・10)「句題和歌の成立と展開に関する試論——紀師匠曲水宴・延喜六年貞文歌合の偽書説と併せて——」(同68集・昭54・6)
- (2) 奥村恒哉氏は「照りもせず曇りもはてぬ」情緒というものが、『古今集』の嗜好にまるで合わなかった」と述べている(新潮古典集成『古今和歌集』解説)。

(3) 『袋草紙』上巻「雑談」に「自此事起三十六人撰出来歟。件撰有不審所謂、深養父、元方、千里、定文等不入之。此人々豈劣頼基、仲文、元真等之類乎。」とある(『歌学大系第二巻所収本』)。

(4) 窪田空穂『完本新古今和歌集評釈』上巻(昭39・2)の同歌の「評」。

(5) 本文は、山岸徳平『八代集全註』所収本に拠る。

(6) 本文は、日本古典文学全集本に拠る。

(7) 本文は、『増注源氏物語湖月抄』(昭2)講談社学術文庫に複製に拠る。

(8) 玉上琢也『源氏物語評釈』第二巻の同語の「語釈」。

(9) 『正治二年俊成卿和字奏状』(『歌論集』)中世の文学、三弥井書店 所収本。

(10) 『新古今和歌集全評釈』第一巻(昭51・10)の同歌の「鑑賞」の項。

(11) 『六百番歌合』冬上・枯野・十三番判詞。

(12) 『奥人』は、国語国文学研究史大成『源氏物語上』所収の定家自筆本に拠る。歌謡などは除いて和歌に限り、古今・後撰重出歌などは両方に計上、

引歌回数複数のものは延べ数として計数した。

(13) 『本居宣長全集』第四巻(昭44・10)所収本。

(14) 尾崎知光「源氏物語に於ける引歌表現——国語美論の一問題に対する試みとして——」(『源氏物語私読抄』昭53・11)

(15) 阿部秋生「おほろ月夜」「むらさき」12輯、昭49・6)

(16) 『新古今集』山家集「金槐和歌集」(鑑賞日本古典文学)の同歌の項。

(17) 久保田淳「新古今歌人の研究」(昭48・3)参照。

(18) 注(15)に同じ。

(19) 石川常彦「拾遺愚草古注(上)」(中世の文学、三弥井書店)所収本。

右に注記しなかった作品の本文は、和歌は『新編国歌大観』(歌番号も)、歌論書は日本古典文学全集『歌論集』に拠った。ただし、表記についてはのみ私意により改めたところがある。